

リシツィナ E.H.

ロシアの研究者の業績にみる樺太研究について

20世紀初頭のサハリンの歴史的な発展におけるもっとも重要な特徴は、この時期のかなりの部分において、サハリン島が二国、すなわちロシアと日本によって分割されていたことである。この事実がロシアにおけるサハリン島の歴史研究の規模や特徴に重大な影響を与えてきた。

北サハリンの歴史に関しては既に数十点の論文集が編まれ、数百点の論文が著されており、一連の修士論文及び博士論文も著されている。それらの著作においては北サハリンの社会・経済・精神生活などのさまざまなテーマが取り上げられ、多面的な研究が行われている。その一方で、日本領有期のサハリン史の研究は大きく立ち遅れている。南北サハリンの研究の進捗に格差が存在することについては、次のような原因がある。

- ① 日露戦争の過程とその終結後にロシアを襲った政治的な動揺。
- ② 1917年以降のロシアにおける政治的権力の変化と、それに伴ってサハリン州が閉鎖的な国境地域とみなされたこと。

ロシアにとってサハリン島が中央から極めて離れたところに位置する島であり、加えて、1905年から1917年までの時期にロシア国内においてきわめて深刻な政治的闘争が続いたにもかかわらず、南サハリンで生じているさまざまな過程が、ロシアの研究者の注目をまったく引き付けなかったわけではない。この時期には、Ф. クプチンスキー、Д. М. ポズドネエフなど¹の著名なロシアの極東史家や日本研究者が著作を著している。これらのなかで、研究者たちは日本の歴史と文化、さらにロシアにおける日本語学習などを研究対象としている。これら極東学研究者のフィールドワークや著作を通じて、サハリン南部におけるロシア人居住者の状況や日本政府によるサハリン南部の拓殖政策についての知識がある程度は普及した。しかしながら、1920年代から30年代にかけてソ連の日本研究者が粛清の対象となったことは、長期にわたって日ソ両国関係を弱体化させ、ソ連における日本の歴史に関する知識を凍結させることにつながった。

ソ連期におけるサハリン史研究はおよそ二つの時期に分けることができる。即ち、1917年から1945年までが第一期、1945から1980年代半ばまでが第二期である。第一期の代表的な研究者はK. ポポフ、A. ユージヌイ、T. C. ユルケビッチ、K. A. ハルンスキーなど²であるが、彼らの著作の中では日本全体が研究対象であり、南サハリンは日本の一部とみなされた。彼らの著作

¹ Купчинский Ф. Новая Япония. - СПб., Посев, 1907; Позднеев Д. М. Материалы по истории северной Японии и ее отношений к материке Азии и России. - Т. I - II. - Токио - Иокогама, 1909.

² Попов К. М. Экономика Японии. - М., 1934; Он же. Очерки географии и экономики Японии. - М., Л., 1931; Южный А. Япония. - М., 1934; Юркевич Т. С. Современная Япония: экономико- географический обзор по новейшим источникам. - Владивосток, 1925; Харнский К. А. Япония в прошлом и настоящем. - Владивосток, 1926.

には樺太の政治体制、工業、農業、運輸などの現状、居住者の生活などについて貴重な資料が含まれている。第一期の研究者たちも粛清の対象となった。そのため、長期にわたって彼らの著作は閲覧することもできなかった。

これに対して第二期の特徴は、この時期におけるソ連の歴史学者たちの多くが日露戦争期および第二次世界大戦末期における南サハリンでの戦闘行動に注目したことである³。しかしながら、当時、利用できる資料が限定されていたことに加えて、階級闘争史観が支配的であったことにより、研究はイデオロギー的色が強く、歴史の客観的理解に資するものではなかった。第二期においては、日本統治期の南サハリンの政治・社会問題や経済発展は看過されることが多かった。第二期においても、日本統治期を取り上げた著作としてはA. M. ロパチェフ「南サハリンにおける日本による殖民の歴史から」、M. C. ヴィソコフ「日本植民地システムの下での南サハリンおよびクリル諸島」を重要な研究として指摘することができる⁴。とはいえ、この時期の研究では日本とソ連の間の社会経済政策のするどい対立が強調されることが特徴的で、それは時には論文のタイトルにも示されていた⁵。

この時期にも日本統治期の全体を研究対象とするような成果が見られた。1970年代にリ・ベン・デュは博士候補論文「日本支配期における南サハリンとクリル諸島」を執筆し⁶、1976年に学位を授与された。この論文は、日本領有期の南サハリンにおける経済的・政治的発展の諸問題を取り上げるとともに、日本による民族政策にも触れている。同論文は、イデオロギー的なバイアスから必ずしも自由ではないが、当時としては、利用可能な資料を駆使したものであり、樺太の歴史についての見識を拓げるものであった。

1980年半ばになるとロシア全体でもサハリンでも歴史学に新しいページが開かれた。イデオロギー的な重圧が除かれ、利用できる資料の範囲が広がり、歴史に関する刊行物が量的に増加したばかりでなく、従来とは質的に異なった水準の論文が現れるようになった。さらに注目すべきことは、サハリンにおける歴史研究に全く新たなパラダイムが現れたことである。それは、サハリン史の研究において新たな概念が導入されたことを意味する。それは、A. A. ワシリエフスキーやM. C. ヴィソコフ⁷の研究がもたらしたものであり、彼らの研究は、その後の多くの研究

³ Внотченко Л. Н., Егоров П.Я. Разгром агрессора на Дальнем Востоке. – М., 1975; Лопачев А. М. Борьба Советского Союза за возвращение Южного Сахалина и Курильских островов. – Южно-Сахалинск, 1975.

⁴ Лопачев А. М. Из истории японской колонизации на Южном Сахалине.// Вопросы всеобщей истории. – Хабаровск, 1972; Высоков М. С. Южный Сахалин и Курильские острова в системе японской колонии.// Краеведы ведут поиск. – Южно-Сахалинск, 1985.

⁵ Ли Бен Дю Хищническая эксплуатация лесных богатств Южного Сахалина в годы японской оккупации.// История, социология и философия Дальнего Востока. – Владивосток, 1971.

⁶ Ли Бен Дю Южный Сахалин и Курильские острова в годы японского господства. Дисс. на соискание ученой степени канд.ист.наук. – М., 1976.

⁷ Василевский А. А. Каменный век острова Сахалина. Дисс. на соискание ученой степени докт.ист.наук. – Новосибирск, 2003. Высоков М. С. История Сахалина и Курил в самом кратком изложении. – Южно-Сахалинск, 1994.

者にとっての先駆的業績となった⁸。

新たな世代の研究者の著作では、きわめて均衡のとれた評価がおこなわれ、双方の国の肯定的な部分を評価している。また、日本によるサハリン島南部の経済開発にどのように問題点があったとしても、サハリン島民は今日まで日本による拓殖の成果を享受しているという事実が率直に確認されている。

今日におけるサハリン史研究の重要な局面は、南サハリンにおける社会・経済・精神生活について、これまでほとんど、あるいはまったく研究の対象となつてこなかった諸側面を取り上げた研究成果が発表されているということである。例をあげると、日本期の文化遺産 (Г. А. Шалкус、И. А. Самарин⁹)、移民史・人口動態学 (В. В. Шичегроф、С. П. Федорчук¹⁰)、将兵および民間人の南サハリンからの日本帰還 (Л. А. Кожина、В. Л. Подпечников¹¹)、南サハリンにおけるロシア人および日本人の墓地調査 (Б. В. Маленков¹²) 等である。

以上のような駆け足での1905年～1945年の南サハリン (樺太) の歴史に関する研究史の概観から、20世紀前半における南サハリンの発展の諸局面を意義付ける試みが過去10年間に行われていることが明らかになる。これらの研究は樺太史を概括する通史の記述に向けての準備段階とみなすことができる。

荒井信雄訳

⁸ История Сахалинской области с древнейших времен до наших дней. Учеб. пособ. – Южно-Сахалинск, 1995; Экономика Сахалина. Учеб. пособ. – Южно-Сахалинск, Сахалинское книжное издательство, 2003.

⁹ Шалкус Г. А. Документы о японских храмах на Южном Сахалине после второй мировой войны в Сахалинском центре документации новейшей истории.// Краеведческий бюллетень, 1996, №2; Самарин И. А. Магическая символика в японской архитектуре период Карафуто.// Краеведческий бюллетень, 1998, №2; Он же. Жилые дома на Южном Сахалине периода Карафуто (1905-1945).// Краеведческий бюллетень, 2003, №1; Он же. «Путь богов» по островам: синтоистские храмы Южного Сахалина и Курильских островов. – Хабаровск, 2005.

¹⁰ Щеглов В. В. Переселение советских граждан на Южный Сахалин и Курильские острова в середине 40-х – начале 50-х гг. XX века.// Краеведческий бюллетень, 2004, №4; Федорчук С. П. Тоёхара глазами россиян. – Южно-Сахалинск, 1994; Он же. Русские на Карафуто. – Южно-Сахалинск, 1996.

¹¹ Кузьмина М. А. Японские военнопленные на Сахалине.// Вестник сахалинского музея, 1997, №4; Подпечников В. Л. Репатриация.// Краеведческий бюллетень, 1993, №1.

¹² Маленков Б. В. Японские захоронения в Сахалинской области.// Материалы международной научно-практической конференции «Япония и Россия: диалог и взаимодействие культур». – Южно-Сахалинск, 2003, С. 89-90.